

2016 年度日本語教育特別講演会（台北 1 月 10 日—11 日）報告

講師：平田オリザ 先生（劇作家・青年団主宰）

報告：台湾協働実践研究会

今回の日本語教育特別講演会は、ワークショップ及び講演の二本立てからなっています。一日目のワークショップは「演劇的手法で対話力を身に付けよう！」という題で、行われました。ワークショップに参加することを通して、「私には世界はこのように見える」「人間とは、このような存在なのではないか」といった、演劇を通しての世界の見方、人間の見方を考える機会を持ちました。そして、後半は、劇を演じることを通して、言葉と話者を取り巻く社会文脈との関わりを深く考え、さらに、セリフとセリフの間に、新しいセリフを加えることによって、どう場面が変化するのか、それらの言葉で作られられた場面への受け止め方がどのように変わっていくのか考えるワークが行われました。つまり、あるセリフを加えることで、個人のコンテキスト（パーソナルベース）の外にあったセリフがパーソナルベースに近づき、自分にとって自然な言葉になるということを体験する機会となりました。

この体験によって、言語教育に携わっている教師として、教材や授業で扱う日本語が学習者のコンテキスト（パーソナルベース）の外側にある可能性について考えさせられ、書かれた文脈の気持ちになって言う（シンパシー）のではなく、学習者のパーソナルベースとの共感ポイントを作る（エンパシー）ようにコミュニケーションをデザインする重要性を学びました。

そして、二日目の講演は、一日目のワークショップで体験したことと関連し、「コミュニケーション能力とは何か～演劇的な手法からのアプローチ」という題で行われました。講演では、先生が今まで携わってきた劇づくりの話、そして、教育と関わっている活動を紹介され、現代の若者は「コミュニケーション能力欠如」なのではなく、グローバル化になった今、「コミュニケーション様式」の多様化（日本と欧米式）に挟まれ、ジレンマが生じている恐れがあることを指摘し、さらに、日本語教育におけるコミュニケーション力を育成するために、「分かり合う会話力」＋「伝え合う対話力」を取り入れる重要性について話されました。講演を通して、21 世紀における生きる力の育成・その人材の選抜のために行うディスカッション劇という新スタイルを導入させる可能性が提示されました。